

## 〈自由投稿論文〉

## オルタナティブスクールにおける子どもの意識変容プロセス： その「共通性」と「多様性」

桑田 湧也（京都大学総合人間学部4回生）

中丸 和（京都大学総合人間学部4回生）

伊藤 駿（大阪大学人間科学研究科博士後期課程）

### 1. 研究背景・目的

近年、「教育機会確保法」を巡り、公教育とは異なる学びの場、いわゆるオルタナティブスクールに関する議論が活況を呈している（山本 2016、倉石 2018 など）。オルタナティブスクールについての議論は、藤根（2019a）の指摘するところによると、前述の「教育機会確保法」を巡るものから思想的哲学的研究、建築学の領域の研究まで非常に幅広く存在する。しかしながら、オルタナティブスクールの実証研究やそれに基づく議論は多くは見受けられない。そうした背景から、藤根はオルタナティブスクールに関する経験的なデータに基づいた実証志向の研究を類型化した。その結果として、オルタナティブスクールに通うメンバーの変容を明らかにする研究の存在はいくつか指摘されているものの、その事例は朝倉（1995）や藤村（2015）によるフリースクールの生徒の「登校拒否」や「学歴」を巡るアイデンティティの変容を検討したものに留まっている。

こうした背景を踏まえ、本研究ではあるオルタナティブスクールを事例に、そこで学ぶ子どもたちの意識変容のプロセスを明らかにすることをリサーチクエスチョンとして設定する。前述のようにオルタナティブスクールについては、そこに通うメンバーがどのような変容を経験していくのかは主たる研究テーマの1つであるものの、「なにが変容した（している）か」という研究の視点のバリエーションについては限定的であると言わざるを得ない。したがって、本研究ではオルタナティブスクールに通う子どもの「意識」に焦点を当て、その変容プロセスを実証的に分析することを通じ、オルタナティブスクールの実証研究の射程に広がりを持たせることを目指す。

### 2. 研究対象

#### 2. 1. オルタナティブスクールXの概要

本研究のフィールドであるX学園（以下、単にXと表記する）は、大阪府に設立された子どもの個性尊重・主体的な市民の育成を目的としたオルタナティブスクールであり、2019年10月現在は創立から約15年を経て57名の生徒が在籍している（内、小学生は45名、中学生は12名）。学級（クラス）は全部で3つあり、小学1～3年生までが在籍する「小学部低学年」（23名）、小学4～6年生までが在籍する「小学部高学年」（22名）、中学1～3年生までが在籍する「中学部」（12名）がある。また、およそ15名弱の常勤および非常勤スタッフが在籍する他、インターンなどといった形で子どもたちの学びに関わる者もいる。本研究の調査においては、筆者もインターンという形で、週に1回、Xを訪問していた。

教育カリキュラムはフレネ教育やイエナプラン教育をベースとして、ESD（Education for Sustainable Development）を行うよう作成されている。具体的には、子どもたちが自身で計画を立てて日本語・算数/数

学・英語の勉強を進める「基礎学習」、子ども自身の興味・関心にしがたって（ものづくりなど）内容や計画を決めて実行する「プロジェクト学習」、学期に1つ定められるテーマにしたがって自分の疑問や仮説を考え、情報を収集し発表する「ワールドオリエンテーション（環境問題や人権問題などのテーマに合わせて自分の課題を設定し、探求学習をする活動のこと）」、クラス全員で決めた1つのプロジェクトに全員で取り組む「共同プロジェクト」、スポーツや音楽などの学習を選択制で行う「選択プログラム」、そしてクラスや学校全体のことについて子どもたちとスタッフが話し合いを行う「集会」といったものがある（集会には、その開催規模として小学部低学年・小学部高学年・中学部・全校の4種類がある）。こうしたカリキュラムを備えたXは、多様なオルタナティブスクールを教育方針や活動内容によって類型化した藤根（2019b）に従うならば「討議指向型」に近いと言える<sup>(注1)</sup>。Xは後述する子どもたちの語りからもわかるように、既存の公教育ではほとんど経験することのできない学習内容を提供しており、また利用者である子ども・保護者やスタッフが学校全体の意思決定や運営方針を話し合う場が数多く設けられているという特徴がある。

### 2. 2. 調査対象者について

本研究は、大阪府にあるオルタナティブスクールX学園に通う5人の子どもたちと、彼らのXでの生活に数年間関わってきた常勤スタッフ3名を対象として実施した（2019年3月時点）。なお、調査の対象となった子どもたちは全員中学生である。その理由としては、中学生の子どもたちは小学生の子どもたちと比較して言語を運用する力や思考力が発達しており、本調査のテーマである「オルタナティブスクールにおける子どもたちの意識変容プロセス」について、子どもたち自身の語りを聞き取りやすくなると考えられたことが挙げられる。子どもたちおよびスタッフらの簡単なプロフィールは以下の表1・2の通りである。

表1 子どもたちのプロフィール（2019年3月時点）

名前（仮名）	性別	学年	在籍歴
A	男	中1	小学4年生時に入学。それまでは公立小学校に在籍。
B	女	中2	小学5年生時に入学。それまでは他県のオルタナティブスクールに在籍。
C	女	中2	小学2年生時に入学。それまでは公立小学校に在籍。
D	男	中1	小学3年生時に入学。それまでは公立小学校に在籍。
E	女	中3	小学5年生時に入学。それまでは公立小学校に在籍。

表2 スタッフのプロフィール（2019年3月時点）

名前（仮名）	性別	年齢	役割
スタッフM	女	40代	X学園校長。テーマ学習や個人面談を通して子どもたちの学びに関わる。
スタッフR	女	30代後半	中学部担任。中学部の子どもたちの学習全般に関わる。
スタッフS	男	30代半ば	中学部担任。中学部の子どもたちの学習全般に関わる。

### 3. 方法

調査では上述のように5人の子どもたちに加え、X学園の校長1名と子どもたちのクラスの担当スタッフ2

名の計8名にインタビューを実施し、5人の子どもたちのX学園入学後から2019年3月時点までの成長プロセスについて聞き取りを行った。また、2018年10月～2019年3月にかけてXにてフィールドワークも行い、現地での子どもたちの様子を記録した。以上の手続きに従って集めたデータをもとに、子どもたちがXで学び生活する中で、どのような意識の変化が起こり、またそれに伴って言動の変容が見られたのかに注目して分析を行った。

#### 4. 子どもたちの変化

以下、5人の子どもたちの変化のプロセスを、インタビューで得られた語りのデータを引用しながらまとめていく。なお、語りの中でIと表記されるのはインタビューアーである筆者を指し示している。

##### ①A(中1)：他者を「言いくるめる」から「受け入れる」へ

Aは小学4年生の夏休みにXに体験に来て、そこからすぐに入学を決めた。Xの在籍年数は3年半ちょっとである。Aが公立の学校からの転入を決めたきっかけは、本人ではなく彼の母親がPTAの活動につかれ「ちょっと辞めたいわあ」と話したことが発端になっている。以前在籍していた公立の学校では友達もいて楽しく過ごしてはいたものの、勉強面については「教科書に書いてあることを先生が音読してそれを生徒が音読して覚えるだけ」の楽しくないものであったようで、そうした学校自体に対する批判的な感情が彼の転校を後押しすることとなった。Xに体験に来た際には、案内役を務めてくれた子とすぐに打ち解けることができ、「今の公立そんなに楽しくないし、それやったらこっち行ったほうが絶対楽しい」、「お母さんもそっちのほうがいいんやったら」と考え、最終的に転入することを決めた。

Aは中学部の子どもたちの中でも、共同プロジェクトや集会の際に話し合いの中心になって、話を仕切ったりまとめたりする場面が多く見られる。本人も周囲から言われることもあって話し合いの場における「喋り」や「まとめ」が得意であると感じており、実際に話し合いの際には自身の主張を伝えることに積極的である。

そうした性格は小学4年生の転入当初からだったと、スタッフは語る。Aは自分の中での正義感やルールを確固として持っており、相手がスタッフでも自分がおかしいと思えば「対等に歯向かってくる」子であるという。しかしこうした態度は他の子どもたちに対しても向けられる傾向にあり、「1個下の女の子とか2個下の女の子やったらAが怖くて泣いちゃう」、「同級生の男の子たちに対しても「〇〇が悪い」と言う」といったことが頻繁にあったそうだ。

こうしたAの特性に対し、スタッフは「他者を受け入れる」ことを重視した声掛けを積極的に行ってきたという。

M：(Aが他の子を泣かせるなどのトラブルがあると) そのたびに、自分はどうなんやろみたいなことを、声かけてというか。相手の気持ちとか、考えてほしい、みたいな。Aくんは頭の回転も速いし口も立つし、ある程度見通しを持てる人なので、イライラするんですよね、そうじゃない人に対しては。なんでこうやってって言ったことができないんだみたいな。そういう人もいるんだっていうことを、繰り返し伝えていって。

(2019年3月 スタッフMインタビュー)

こうした声掛けは、Aの中に少しずつ意識の変化をもたらしたようであった。彼はスタッフからの関わりで印象に残っていることに「一人ひとりに、良いところも悪いところもあるから、そこで、じゃあなんで俺はできないのに、俺が言われたというよりかはみんなが言われたんやけど、一人ひとりが長所を、さらに長所にさせて、短所を補うことが、大切なことやと思うで」と言われたことを挙げた。それを受け、「人それぞれ、能力があるっちゃあるから、そこでなんでお前できひんねんってなるのは違うな」と考えるようになったと語った。

こうしたことを意識するきっかけとなった出来事に、小学6年生のときに同級生の男の子2人と間にたびたび起こっていた“けんか”があったという。6年生のときにXでは学校全体で夏祭りの準備取り組んでいて、Aも同級生の子どもたちと一緒に「たこせん」の出し物を出すことになっていた。Aは同級生の中でもとりわけ頭の回転も速く口も立つため、同級生の子どもたちを仕切って準備を進めており、仕事の割り振りも主にAが決めていたという。同級生の男の子の中にはAにちゃんと希望する仕事をさせてもらえる子もいたが、ある2人の男の子はAから雑用係の役割を押し付けられたようだった。それをきっかけに2人が怒り、けんかになったことがあったという。それ以後も、口論だけでなく互いに物を投げ合うなど激しいけんかをしばしば繰り返していた。こうした状況を受けて、中学部の入学を前に、スタッフらも間に入って3人が話しあう機会が設けられた。その話し合いのことについて、Aは以下のように回想していた。

A：…(中学部に)入学する前に話し合いってのを4回くらい設けられてて、この子はこれが苦手やから、こうするのがいいみたいな、お互いのことを言う機会があつてんけど、まあそこで(スタッフから「他者を受け入れる」という主旨のことを)言われたかな。

I：なるほど、じゃあその時は結構、「確かにそうやな」って納得した？

A：でもそのときは、は？って思ったけどな。短所は短所やし、例えばじゃあ物を投げる子がいるとしたらそれを補うって何？とは思ひ、そこは謎やけど、まあでも、今そんなに仲悪くないから、普通に遊んで、やっぱお互いが注意したりそういうことが必要やなって思うようにはなった。

(2019年3月 Aインタビュー)

このように、Aはスタッフの声掛けについて当初は納得できなかったものの、時間が経つ中で部分的に理解できるようになったと語った。

こうした経験をする中でAは、他者との関わりの中で自分自身が抱える課題を対処できるようになってきた、と話した。以前は話し合いの場において話がまとまらなかったりすると「いらっとする」ことがあり、他の子に対して怒ってしまったり結局うまく話を進めることができなかった。しかし中学部に入って以降は、話し合いがまとまらない場合でも、「ちょっとうるさいから黙って！」といったとしても全然効果がない」と認識するようになり、怒りをあらわにするのではなく「今はこういうことしたいから静かにしてくれへん？」と言えるようになったという。

##### ②B(中2)：周りを見ることを学ぶ

Bは、他の子どもたちとは異なり、小学校1年生から中学校2年生3学期現在までオルタナティブスクールにしか通っておらず、公立学校の通学経験はない<sup>(注2)</sup>。小学校1年から4年までは長野県のY校に通っていたが、小学校5年時の父の転勤をきっかけに大阪に移り住むことになった。本人が「今から公立学校に通うのはしんどい」と考えていたことに加え、保護者も公立の学校よりもオルタナティブスクールの方がいいと考えて



いたこともあり、「前の学校と似たようなところ」を探していたところ、Xと出会い入学を決めたようだった。最初Xに来た時は、前にいたオルタナティブスクールとは異なり校舎の狭さや人数規模の少なさ（当時Xは20～30人ほどの生徒数だった）に「これ大丈夫かな？」と驚いたという。

Bは話し合いの場において積極的に発言する姿がよく見られる。彼女は話し合いの場を「日常ではあまりなくて、すごく面白い」と肯定的に捉えている。彼女は転校したばかりの小学5年の時から「自分の意見を強く言える人」だったと、あるスタッフは語る。一方、最初は自分のようにしっかりと意見を言うことができない人に対して、「なんで言えないの？」と感じたり「イラっとしてしまう」ところがあったという。そうしたBの一面をスタッフは課題として彼女に指摘することも多かった。毎回の懇談のときには「他の人からはBはこんな風に見えるよ」と客観的なアドバイスをしたり、保護者へも「(Bには)自分の正義みたいなのがあって、そういうのに合わない子にはきつかったりもします」と伝えて家庭内での話し合いを促す等、Bに他者を大切にしてもらうようにアプローチをしていたという。

そうした関わりを経て、段々と他者に対して優しさを示すようになってきたという。Bの変化について、あるスタッフは以下のように語る。

R: 本当に低学年の人たちにも、あの人わかってないなと思ったら、それを言葉にして、丁寧に説明したりとかして。少し前までは、それを面倒くさいと思ってたのかなあと。その、目線がちゃんと、わかる、理解できる分、そうじゃない人たちとの歩調の早さの違いがあったんだけど、その人たちに合わせてくれるようになった感じがして、そういう面での柔らかさとかが見えたなと思って。

(2019年3月12日スタッフRインタビュー)

このように、Bは以前のように自分の意見をしっかりと表現するだけでなく、意見を言えない人を受け入れられたり、話を分かっている人に説明したりするといった配慮もするようになったようである。

また、B自身はそうした変化について、中学部に上がったこともきっかけの一つであると考えているようであった。

B: 6年生のときまで、自分より(年齢が)下の子が多かったのが、引っ張っていかなくやいけないなっていう意識が結構強かったんだけど、一年生(になって)はいつから、上に2・3年生がいっぱいいるから、ちょっと自分が余裕が生まれたのかなっていうのがあって。自分で上に引っ張っていかないとっていうのよりも、今は私が何もしなくても話進んでいくからそうじゃなくて、もっと周りのこと見とけたらなっていう。

(2019年3月12日Bインタビュー)

このように、Bは中学部にあがって多くの先輩がいる環境になったことで、「自分で上に引っ張っていかないと」という責任感ではなく、彼女自身の視野を広げることを意識するようになったようだった。

現在は2年生となり、3年生もE一人であるため立場としてはみんなを引っ張ることも考えざるを得なくなっている。こうした中学部内の立場の変化は、中学部に上がって以降の彼女のスタンスに若干の変化をもたらしているようである。

I: 今逆にでも、2個上が抜けて、あたしからの印象だとBちゃんとかCとかが(中学部の話し合いなどを)引っ張っていつてるのかなって思うのだけど、再びそういう引っ張っていく側になってきて、やっぱり周りを見るっていうのは続けている感じなのかな?

B: なんか、多分、わかんないけど、2パターンやってみて、周りを見て自分がどうしたらいいのかっていうのを考えて、その上で自分の意見を言うっていうのがちょっとずつできるようになってきたんじゃないかな

(2019年3月12日Bインタビュー)

このように、B自身は中学部で時間を過ごす中で、「周りを見ること」と「自分の意見を言う」ことを同時に意識し、組み合わせることができるようになってきていると語った。

また、Xに来てできるようになったこととして、「自分で計画して、順序を考えて、進めていく」こともあると語った。特に学習に関しては、「自分で考えて自分でやらない」という意識を持っているようで、「見て安心してられる感じ」とあるスタッフは語る。Bは中学1年生の頃から「学習管理アプリP」を使って計画的に学習を進めているようで、基礎学習の時間では実際にPCで動画を視聴して学習に取り組む姿もよく見られる。基礎学習の時間が終わり休憩時間になっても集中して勉強する姿が散見されるなど、学習における集中力も高い。BはXに来てから「自分で計画するってことが、増えてきて」おり、そうしたことは「多分普通に公立の学校通ってるよりも、できるようになってるんじゃないかな」と実感しているようである。

そのように基礎学習は真面目な取り組みが目立ってきた一方、テーマ学習については、小学部の頃には「自分が意味がない感じるとパタンとやらないところがあった」という。中学部に入ったころも「しなきゃいけないもの、興味のないものはやる気がわからない」というスタンスは続いていた。

しかし、そんなテーマ学習への意識の変化について、あるスタッフは次のように語ってくれた。中学部の「地球温暖化」をテーマにしたワールドオリエンテーションのとき、はじめこそ「こんな大きなテーマは考えられない」と不満に思っていたが、自分のテーマを「動物保護」にしたことで動物や環境を保護する団体にメールで問い合わせをすることがあった。そのメールでのやりとりを実際に発表につなげることができたことをきっかけに、手ごたえをつかんで前のめりにテーマ学習に取り組むようになったようである。

また、テーマ学習の際に書くレポートについては、内容の充実度よりも「なんとか書き上げる」ことや、「こう書いたらきっと聞いてる人たちも面白いだろうとか、納得するだろうなってこと」を優先して考えているという。そのため、どれくらい自分の意見がレポートに入っているかわからないということも語っていた。

### ③C(中2):「得意なこと」のとらえ方が多面的になる

CはXに小学2年生の2学期から転入し、在籍年数は6年と少しになる。発達に課題を抱えていた兄が公立学校からXに移り、それに伴ってCもXに入るようになった。Xの体験の際には「自分の好きなことができたとか、いろんなことが結構できるし」「(公立の小学校と比較して)絶対こっちの学校がいい」と思い、入学を決定したという。

もともと真面目な性格であったが、Xに来た当初は内気で引っ込み思案な性格で、積極的に人前に出るタイプではなかったという。しかし、大きくなっていくにつれ人前でも堂々と振舞ったり、話し合いをまとめたりすることができるようになっていったようだ。ただ、自分が率先して前に出るというよりも「常に周りをさりげなくサポートする感じ」だとスタッフは語る。

Xではよくプロジェクト学習の時間などにお菓子作りや工作に取り組んでいる。ものづくりは保育園に通っていた頃から好きだったが、公立の小学校に通い始めてから取り組む時間が大きく減ってしまい、物足りなさを感じていた。そうしたこともあり、ものづくりなどをはじめ様々な体験をすることのできるXのカリキュラムや教育方針を好意的に受け止めている。

彼女はXで様々な体験をする中で、「自分の好きなこと」や「新しい自分」を発見できるという。アトリエの授業では、絵を描いたり塗り絵をしたり色をつくったりする中で、「自分が色とかデザインとか考えるのが好き」ということに気づいた。様々な体験を通じて発見した自分の好みについての“共通点”を見つけることによって、自己理解を深めている。

自分自身については、「何でも考えること」が得意だと語っている。何かに取り組む際にも「こうやったらこうなるなあ」「(自分は)こう思ってるなあ」「こうやったら面白いかもしれへんなあ」と考え想像することが自分の長所だという。そうした長所は、「小さい頃から人をよるこぼせることが好きやった」という自身の特性から「気づいたらそうしていた」一方で、Xでのワールドオリエンテーションなどで「物事の本質を考える」ことを通じて養われたと本人は考えている。

そうした「何でも考えること」は、「何かを達成するために、具体的に計画を立てたりする」ときや「相手の気持ちを考える」ときに役に立つということを、本人は実感している。実際にそうした長所が彼女の基礎学習でも活かされていることが、スタッフの語りからもうかがえる。

S:基礎学習とかも、Cも、自分の計画で、この年これだけやるっていうので、2月後半ぐらいでもうなんか、2年生のテキストがだいたい、1個1個終わってきたっていうようなことを言っていて、そこでね、他の人にペースメイクされなくても、自分で計画できるっていうのとかもあるし。

(2019年3月 スタッフSインタビュー)

一方で、「何でも考えること」が逆に短所になることもあると、本人は語っている。

C:(相手の気持ちを考えられることについて)でもそれも、やっぱり、相手の気持ちを考えすぎてしまったりとか、それによって自分のジャッジが、相手のジャッジに影響されてるのだったりとか、っていうところがあるから、そのなんかもう、考えすぎてしまって行動を起こせへんくて結局なんもできてへんみたいなきがあるから。

(2019年3月 Cインタビュー)

このように、「何でも考えること」は場面にはよるものの、本人にとって強みであると同時に、「自分の価値観を貫くことができない」という点で弱みにもなり得る。

さらに、この傾向は「将来の夢」について考えていくうえで、本人にとって無視できない課題となっているようである。Cは幼いころからずっと「保育士になりたい」と思って過ごしてきたが、妹が生まれたことをきっかけに「小さい子と触れ合いたいという気持ちが満足されてき」ており、最近になって保育士に「そこまでなりたいたいなあ」と思うようになったという。これまで将来の目標に違和感を感じてこなかった彼女にとって、こうした思いを抱えるようになったことは大きな転機であり、これまでの自分の姿勢を見直すことになった。

C:結構、考えて動いているから、物事の正面にぶつかって生きていくことをうまく逃れた気がしてきて、最近。それで、正面からぶつかってちゃんと向き合ってたんじゃないかみたいな風に思ってきて。だから、自分っていうものをちゃんと見つめなおすってことが不安っていうか、怖いっていう風に思ってるんかなって。思ってるだけやねんけど。向き合ったわけじゃないから。そういうところも、ちょっと考える前に、考えたらどうなるんじゃないかって思うことを考えすぎちゃうから。

(2019年3月 Cインタビュー)

このように、Cは自らが「考えてしまう」ことによって自分が物事に対し正面から向き合ってたぶつかり、自分を見つめなおすことを意図的に避けてきてしまったと語る。こうした本人の課題感にはXのスタッフにも共有されているようである。あるスタッフは、Cがこうした思いを抱える背景に「兄の存在」があるのではないかと考えている。Cの兄には発達障害の課題があることは先に述べた通りだが、物事に熱中して取り組み、壁に当たってパニックに陥りやすい性格であったという。

M:お兄ちゃんがいて、お兄ちゃんは常にパニックになってなくても熱いっていうか一生懸命っていうか、あーどうしようどうしようってこう、ワチャワチャとこう(Cの)目の前にいてるっていう状況なので。

M:お兄ちゃんっていう人は、常に壁があるとそこにバーンってぶち当たりながら向き合ってきた人やけど、そういうお兄ちゃんを見てるから自分は壁があると、すって避けてきたということ言っていて。で、しかも、お兄ちゃんは避けれずにぶつかるけど、自分は避けれてしまうから、ちゃんと自分を見つめるとか向き合ったことがなかったかもしれないみたいなことを最近言っていましたね。

(2019年3月 スタッフMインタビュー)

ここからわかるように、Cは自分と兄の物事への向き合い方の違いを真逆なものとして認識し、将来の夢について具体的に考えていく中で、自らの課題を浮き彫りにしていた。

そうした状態のCに対し、スタッフも本人の特性に合わせた声掛けを心がけている。「頭で分析してしまうタイプや」と語るCに、「それやったら、考えるだけ考えてみてもいいんじゃない」と言い、考え抜くことで何か見えてくるのではないかと方向性を示した。それだけでなく、なんとなく「こちら側の方向なんじゃないか」という本人の直感を大切にすることもアドバイスしたという。

また、「人との関わり方」も自分自身にとって成長したところだと考えている。共同のプロジェクトなどに一緒に取り組む中で、「自分の意見が言えるようになったり」「相手の気持ちを尊重できるようになったり受け入れられるようになったり」した。

中学2年生時のフィリピンへの研修旅行(この修学旅行はおおよそ10日間ほどある)では、他の中学部の子どもたちやスタッフと朝から晩まで行動をともにするなかで、「他の子どもたちに対して「ちょっと、んーって思う」ことや「そんなこと言わんでもいいのにな」ということを見つけることもあるが、一方で「いいところもつけるし、その人のこともよく知れる」ため、「よくも悪くもその人のことをすごく知れる」ものだったと話した。またXで日常的に行われる話し合いについては、多数決では難しい少数意見の尊重をすることができ、一人ひとりが納得して動くことにつながるって良いと、好意的に捉えていた。



こうした経験は、彼女が他者と全人格的に関わる中で、話しあう場を通じて自分の意見を伝えつつも、他者を受け入れていこうとする姿勢を養ってきたと考えられる。特にCの場合、インタビューの中では他者に対する寛容さについての言及が目立ち、Xで生活を送る中で彼女が他者を受け入れることについて様々に考えを巡らせてきたことがうかがえる。

#### ④D（中1）：学び方が主体的になる

Dは小学3年生の3月に公立小学校からXに転入し、在籍期間は約4年になる。転入に至ったきっかけに、小学3年生になったときに勉強する量が増えて宿題も多くなり「しんどい」と感じたことがあったという。Xに体験では「すごく楽しい」と感じ、転入することを決めた。

Dの父親は敬虔なクリスチャンであり、家庭では聖書の教えをしっかり守ろうとする習慣があるという。スタッフMは「そうした習慣が影響してか、Dはとても几帳面で生真面目な性格」だと語る。また、両親ともに手先が器用で、Xでのハロウィンのイベントの際には、とてもクオリティの高い仮装用衣装をDのために手作りで用意する程である。

そんな両親のように、何かを手作りすることはD自身も得意とすることである。中学生になってからのプロジェクト学習では、段ボールを使って大きな船の模型をつくっているが、細部まで丁寧につくられており、他の子どもたちやスタッフからも「すごい」と評判になっている。しかしスタッフの話によれば、1年生の3学期末にあったプロジェクトの経過報告会では、Dは船の模型をなかなか他の人に見せようとしなかったという。その背景には、「こだわりが強いがゆえに完璧主義に陥りやすい」Dの性格があると、スタッフは考えている。そうした特性に対して、スタッフはDが「自然体」でいることがきるよう、声をかけていこうと心がけている。

一方、Dは学習面において前向きな変化が見られるようである。特にここ1年間では、基礎学習を進める上でも自分でノルマを細かく設定し着実にこなしていくというように、「自分で責任をもって学んでいく」姿が見受けられるという。そうした学習に対する姿勢の変化について、D自身も自覚的である様子が、本人の語りからもうかがえる。

D：これ思ったのは最近のことなんだけど、あの、入ったときは、もうなんか、勉強とかも自由だったから、全然やってなくて、すごい少ない量しかやってなかったんですけど、中学生になってちょっとやばいなって思って、自主的に、するようになったから、自分で勉強するようになった。

(2019年3月Dインタビュー)

こうした変化のきっかけとして、「本人の勉強に対する不安」があるという。彼はこどもの森の学習カリキュラムを「いろんなことを覚えたり学んだりする」ものであると考える一方で、「普通の学校のカリキュラムから大きく遅れを取っている」とも感じている。特に、学習事項の積み上げが必要とされる数学や国語といった教科に大きく不安を抱えているようだ。そのためDは中学1年生から塾に通って数学を習っており、塾でもらった教材や市販の学習参考書で積極的に学習を進めている。

Dの積極的に学ぶ姿勢が見られるのは基礎学習だけではない。プロジェクト学習の場面でも、何か違和感を感じた際にはスタッフに対して漠然と質問するのではなく、「自分で考えて、これでいいか」という質問の仕方をしたり、「(自分のやっていることについて) こうすればもっとよくなる」ということをよくスタッフに聞くなど、自分で考えることを徹底しているようである。

そうした変化の背景には、Dに対して自立的な学習を求める、スタッフの働きかけがあったようである。

I：ここのスタッフさんと、普通の学校の先生との違いみたいなので、感じたりする？

D：どうしたらいいかなあみたいなきに、自分で考えて、みたいな、言われることが多い。

I：そう言われたときって、どんなふうに思う？

D：そりゃ困ることもあったし、自分の考えで動くこともあったし。

I：それ、自分で考えてっていわれて、いろいろ思ったりすると思うんやけど、それがこう、前入ってきたばかりのときと、今とで、なんか変わってきてたりする？

D：うーん。最近あんまり言われないうっていうか。言われないうっていうかも、あんま聞かない、感じ。

(2019年3月 Dインタビュー)

このように、Dの自立的な学びの姿勢はスタッフとのやり取りのなかで出来上がっていったと考えられる。また、スタッフから見てこうした変化は急に起こったものというよりも、時間をかけて徐々に現れてきたようである。

以上のように自分の学習については積極性を示すDだが、友人との関係や話し合いの中では自分の意志は控えめになると、あるスタッフは語る。

R：友達とかに対して、ちょっと嫌だったりとか、そういうのは言いにくくて、今ちょっと減ったけど1学期2学期とかは、叩かれたりとか、冗談で友達同士でやりあって、その時は痛かったけど嫌がったりなくて、嫌、やめてって言うけどそれが相手に伝わっていない感じの。

R：話し合いが終わった後に、「ほんとはこんなことちょっと思ってたけどいえなかった」みたいな感じで言うから、そこがもうちょっと、…前よりは言えるようになってるけど、みんなと違う意見を持っていたとしても、それを言えるようになっていけたらいいのかなって思ったりとか。

(2019年3月12日 スタッフRインタビュー)

そんなDにスタッフからも実際に働きかけている様子が、フィールドワークのなかでも見られた。

(共同プロジェクトの場面) Dは、議論ではなかなか発言しないが、気になっていることがあったみたいで、スタッフRさんに質問していたが「個人の意見だから・・・」と気にしていた。それに対してRさんは「個人の意見が大事やねん」と言っていた。

(2018年10月5日 筆者フィールドノート)

こうした働きかけを通して、スタッフはDが他者に自分の意見を言えるようになることを期待している。

#### ⑤E（中3）：他者に自分を表現できるようになる

Eは、Xに小学5年生から転入し、在籍年数は5年になり、もうすぐ卒業である。小学4年生までは公立小学校に通っていたが、両親の知り合いの紹介でXを知り、見学後入学を決める。EはXを見学した際にXへ憧

れの気持ちを抱き、入学を決意したという。Xを見学した際のことをEは以下のように語る。

E：ここ見に来た時に、見学したときに、すごいみんなここで過ごしてる人いいあってなって、なんか、自分もこういう生活してみたいみたいな、憧れみたいな。で、それで体験行ったりとかして、入った。…勉強とかだけじゃなくって、プロジェクトとかで、なんか物作れたりとか、あとなんかみんなで全体的な感じでスタッフとかも遊んでたりとか、ニックネームで呼びあってたりとか、そういうところ。

(2019年3月 Eインタビュー)

Eは、得意なことは好きなことをすることだと言う。その好きなことの一つとして、絵を描くことがあげられる。休み時間やプロジェクトの時間に絵を書いていることが多く、教室に掲示してある自己紹介の画用紙にもEオリジナルの絵が書かれている。絵を描くことは小さい頃から好きで、ほぼ毎日書いているそうだ。しかし、この好きなことを多くの人に自由に表現するということは、Xに転入した当時はあまりできていなかったとスタッフの一人は語る。

M：Eは、入ってきた頃は、ちょっと暗かったっていうか、あんまりこう、人と関わるのが苦手で、特定の人とだけ関わって、あんまりこう、みんなと打ち解けるって感じじゃなかったんですね。その、特定の人とだけ、世界をつくってますみたいな、感じだったんだけど。

(2019年3月 スタッフMインタビュー)

自分の好きなことや自分の世界を特定の人ではなく、様々な人に表現できるようになったのは、Xでの生活の中で自分の表現したものが他人に認められたり、得意な絵を描くことで共同プロジェクトや海外研修の際に活躍できたことがきっかけだったと、スタッフは考えているようだ。

M：彼女が、6年生ぐらいの時やったかな、5、6年の、5年やったか6年やったか忘れたんだけど、なんか、その、てるてる坊主のキーホルダーみたいなのをいっぱい作って売ったことがあったんですよ。…そうそうインパクトがあって、Nちゃん(スタッフ1人のこと)なんか一個買ったけど怖いからどうしようって言うふうなくらいの、50円の100円やったんですよ。EのワールドっていうかEちょっとおたく系で、アニメとかそういうのが好きで、Eの、Eワールドの、やつやった。それがね、完売したんですよ。

(2019年3月 スタッフMインタビュー)

また、上記のようなこと以外にもEの好きなことや得意なことが自他共に認識しやすく、海外研修の時も最初の日本紹介の紙芝居でたくさん絵を描くなどして活躍したという。このように、イベントへの参加や共同プロジェクトなどといった、自分の好きなことや世界観をだしても周囲の大人や子どもに認めってもらったり褒めてもらえる豊富な機会がこのXには存在していることも彼女のこの変化につながったと言えるだろう。

M：そんなんとか、なんか、いろんなことが、積み重なって、なんかすごくこう自信につながるというか表現をするとか、自分の世界を出すみたいなことが、なんかこうできてきたっていうか。オタク文化っていったらちょっと悪いんですけど、ちょっとこうなんっていうか、え？って感じのとこあるんですけど、ためら

わずに出しても、そうやって認められるチャンスみたいななんがいろんなとこであって。

(2019年3月 スタッフMインタビュー)

また、Eは話し合いの場や友達との関係を築く上で、自分の意見を言えず、グッと気持ちを押し込めてしまうという課題を以前は持っていた。そのことは、本人も、もともとは周囲に流されてしまうタイプで、自分の意見を言えずに嫌なことでもやってしまうこともあったと語っている。しかし、Xでの生活を通して、小学5・6年生の2年間で自分の意見がだんだんわかるようになって、中学部の3年間で自分の意見が言えるようになったという。自分の意見がわかるようになったきっかけとしては、日記を書いていたことと、Xへの電車通学や、Xの授業で様々な場所への訪問を、自分で行ったり友達で行ったりするようになったことがあるという。また、自分の意見を他人に伝えるということに関しては、話し合いなどで必ず自分の意見を聞かれることや、体験入学の際仲良くなった友達の言葉がきっかけになったという。

M：入学して1日経ったときに、体験に来た子がいて。その子とすごい仲良くなって。で、だからその子と一緒にプロジェクトとかもやるってなって、ずっとその子と同じ行動してて、自分が嫌とかそういうの全然考えてなくて、でもやってたから、そういう時になんか、本当に合わせるんじゃないかって、本当にやりたいの？みたいに言われて。で、あとその子が、アメリカでいま住んでるんですけど、アメリカ行っちゃって、そういうところからなんか、その子がなくなったから、そういうの言われたのもあったし、なんか自分で選んだりとかして。で、5年もやったから、自分の意見がちゃんとあるようになった。

(2019年3月 Eインタビュー)

このようなEの変化は、スタッフも指摘しており、葛藤しながらも自然体になり遂げた様子を以下のように話している。

R：だんだんと違っても言うことが増えてって。ある時とかはこう、中集<sup>(注3)</sup>とかが終わった時にきて、目に涙が溜まったまま、ほんまは嫌やねんとか教えてくれることがあって。葛藤しながらも、それを自然体でやっていってる。やってる気がするなあと思って。

(2019年3月 スタッフRインタビュー)

以上のような自分の意見を持ちそのように人に伝え行動するという点は、E自身の進路選択においても現れている。Eは、高校に進学予定だが、その進路を決める上では、友達と見学に行ったり、私立の高校展に行ったりして考えたという。しかし、そこでは大学のことなどを見据えた学校が多く、あまりいいところがなかったと思ったようだ。その上で、自分を取り組みたいと思っていた留学ができ、単位制の高校を選択してそこに進学すると決めた。本人は、以前の自分を周囲に流されていたと振り返りながら、今は自分が嫌なようになるのが嫌やから、頑固やなあと感じるとも語っている。

## 5. 考察

ここまで、子どもたちへのインタビューと筆者のフィールドワークを通じて、Xでの学習や生活を通じた彼らの意識の変容プロセスを描いてきた。以下では、そうした子どもたちの変容を1)「共通性」2)「多様性」



の2点に分けてまとめていく。

### 5. 1. 子どもたちの意識変容の「共通性」

オルタナティブスクールXで、子どもたちはそれぞれが様々な経験をしているが、彼らの変容には一定の共通性が見られる。

第一に、「主体的に学ぶ」ようになるという変化である。Xのカリキュラムでは、基礎学習で自分の勉強計画を立てて実行したり、プロジェクト学習で自分の興味・関心にしたがってテーマを設定したりと、自らの学習内容に対する子どもの裁量が大きくなっており、子どもたちの主体的な学習を促進する機能を果たしている。これに加え、子どもたちに対するスタッフの関わりの影響も大きい。Dがスタッフから「自分で考えること」を促されたように、子どもたちが自身の学びに意欲的に取り組んだり積極的にマネジメントしたりすることはスタッフらの目指すところでもあり、そうした思いが子どもたちへの働きかけにも表れている。

第二に、「自分の意見を伝える」ことができるようになるという変化がある。Xでは行事やイベント、共同プロジェクトの内容や、X内のルールなどをテーマに、子どもたち同士で話し合いを行う機会が非常に多い。話し合いをする中で最初は引っ込み思案だった子どももだんだんと自分の意見を言えるようになってくるが、その背景にはスタッフの介入があると考えられる。Eのケースはその代表例であり、当初「自分の意見を言えずに気持ちを押し込めてしまう」課題のあった彼女は、話し合いの際にスタッフから「Eはどう思う？」と何度も聞かれたことで、少しずつ自分の意見を周りに伝えられるようになっていった。また、「個人の意見だから」と言って他人に意見を伝えることに控えめなDに対し、スタッフからは「個人の意見が大事やねん」と子どもの意見を尊重しようとするといった働きかけが見られた。このように、話し合いの環境が数多く設けられていることに加え、意見をなかなか言えない子どもに対しても積極的に発言の機会を設けようとするスタッフの関与もなされることで、子どもたちに変化が生じていると考えられる。

第三に、「他者を尊重する」ようになるという変化が見られる。Xでは話し合いに際して、自分の意見だけでなく他者の意見も大切にすることが重視されている。AやBといった自分の意見を伝えることに積極的な子どもは、物事を取り決める際に他の子どもを言いくるめてしまったり、「なぜ自分のように意見を主張することができないのか」といらいちを感じてしまったりすることがあった。そうした子どもたちに対して、スタッフは彼らが自分の態度を客観視したり、他者の気持ちに配慮したりすることを促すような働きかけを行った。こうした関与は、AやBに意見を言えない人を受容したり、穏やかに自分の主張を伝えたりするという行動の変化を促した。

以上挙げた三つの共通要素は、単にXのカリキュラムが子どもたちに与えた影響からだけでなく、子どもたちがXの他の子どもやスタッフといった他者と関わる経験を通して見いだされたものであると言える。そうした経験が生まれる背景には、様々な個性を持つ人が互いに認め合い対話していくという、X特有の教育方針が存在している。こうしたXの文化ともいえるものは、公立学校と比較される形で、子どもたちにも認識されている。

A：なんか、こう、やっぱり公立とかやったら、全体的にさ、〇〇さんみたいなさ、さん付けとかで呼びましようみたいなあるやん？だから、友達と距離があんまり縮まらんかったりさ、すると思うねんけど、Xとかやったら、まあ要はもう、遊ぶわけやんか。だから、伸びた(＝自分が成長した)というよりは、低中高で遊べるから、中学校の同級生とばかりじゃなくて、低学年とも遊べるし低学年と遊んでたらま

たいろんなこと面白かったりするし、人とやっぱり接する、っていう能力は来たら多分全体的に高まってらんちゃうかな。

(2019年3月 Aインタビュー、下線は筆者による)

B：公立の学校に行ったことないからあんまり分からないんだけど、なんだろう、自分の意見を聞き入れてもらえたり、みんなで話し合うのがあるっていうのがすごいいいなって思ってた。結構、なんだろう、普通に生活してて、相手の意見をちゃんと聞く場っていうの多分ないから、そういう、場があるっていうのすごい面白いし、普通にある学校とか、会社とかわかんないけど、そういうのと違ってすごいいいのになって思います。

(2019年3月 Bインタビュー、下線は筆者による)

子どもたちは特に他者と話し合う場があるといった点に独自の「Xらしさ」を感じており、その「Xらしさ」を感じ取りながら価値観を形成している。自分自身の気質やそれに伴う行動と「Xらしさ」の間に何らかのコンフリクトが起こると、スタッフによる働きかけが行われることになる。その結果生まれた子どもたちの意識ないし行動の変化は、子どもたち自身やスタッフらによって「成長」と見なされるのである。

### 5. 2. 子どもたちの成長の「多様性」

上記のように、子どもたちの意識変容プロセスには一定の共通要素が見られる一方で、子どもごとの多様性も見られる。

Cは、他の子どもたちと同様に「内気で引っ込み思案な性格だったが、大きくなるにつれて自信をもって周りに意見を言えるようになった」り、「他の子どもたちとの話し合いを何度も経験するなかで、相手の気持ちを尊重するようになった」りするという変化が見られた一方、彼女に特有の「自分の得意なことの長所と短所を自覚するようになる」という意識の変化も経験した。Cは幼い頃から「なんでも考えること」が得意であり、学習計画を立てたり他者の気持ちを配慮することに活かされていたことから彼女の「長所」と認識されていたが、Xでの生活のなかで「他人の気持ちを考えすぎてしまい自分を貫き通せなかつたり」、「先回りして考えて、自分の気持ちを見つめるという難しいことを避けてしまつたりする」という経験をする中で、自身の短所でもあるということを見つめるようになった。こうした彼女の気づきには進路選択が近づくという状況に加え、普段から彼女の特性について考えを巡らしてきたスタッフの声掛けの影響も大きいと言える。

また、Eは自分の意見だけでなく、得意な絵についても、多くの人の目につくところで表現することに抵抗をもっていた。しかし、お祭りで自分のデザインしたものが完売したり、海外研修で紙芝居づくりをして、たくさん自分の絵を褒められたり認められたりするといった経験を通じて、徐々に自分の世界観を様々な人に表現できるようになった。

さらに、子どもたちの成長における多様性は、以上に示した子どもの個性に関する側面だけでなく、共通要素の変化に要する時間や辿るプロセスについても見られる。例えば、「自分の意見を伝える」ということに関して、Cは大きくなるにつれて徐々にできるようになった一方、Eは自分の考えがあっても言えずに涙することもするなど、激しい心理的葛藤を経験している。

このように子どもの成長において多様性が見られるのは、Xに通う子どもたちが課題として認識したり、スタッフが課題だと言及したりするものが、子どもたちの気質や特性によって大きく異なっているからであると

言える。主体的な市民の育成を教育方針とするXには、通う子どもが身に付けるべき資質について一定の共通認識があり、それが「共通性」として示した要素にも表れている。しかし、子どもたちの変容プロセスはそうした教育方針だけでなく、子ども一人ひとりの性質にも基づいている。スタッフがこのことを前提として子どもたちへの関与を行うことで、Xでの子どもの意識の変化には「共通性」と「多様性」が共存することになるのだと言えよう。

## 6. 結論と今後の課題

本稿では、オルタナティブスクールXにおける子どもの意識変容プロセスを、彼らやスタッフの語りと、フィールドワークで見られた彼らの様子をもとに分析した。その結果、彼らの意識の変化には「主体的に学ぶ」「自分の意見を伝える」「他者を尊重する」という三つの共通要素が確認された。また、そうした「共通性」だけでなく、子どもたちの気質や特性によって彼らの抱える課題が異なったり、彼らの変化に要する時間や辿るプロセスに差異が存在したりするといった「多様性」も見られた。そして、こうした子どもたちの変化のプロセスには、Xの基づく教育方針を認識しながらも、それぞれの子どもの個性に応じた成長を促そうと関わるスタッフの存在があることが示された。以上の結果は、オルタナティブスクールに通う子どもたちの意識変容プロセスを実証的に示す有効な事例となるものであると言える。

一方で、本研究では子どもたちの意識変容プロセスの背景要因としてスタッフや他の子どもたちとの関わりを分析することができたものの、子どもたちがX同様に多くの時間を過ごしており、彼らの価値観の形成に強い影響を与えると考えられる「家庭」について分析することはできなかった。Xは保護者が教育方針に賛同し、学校運営に積極的に参加するケースが多いため、子どもと保護者との間の関わりは彼らのXでの成長にも大きな役割を果たしていると考えられる。こうした家庭の要因についての調査・分析は今後の課題としていきたい。

### 【注釈】

- 1) 藤根 (2019b) は、日本全国のオルタナティブスクールを対象に質問紙調査および web 上のテキストデータの収集・分析を行い、クラスター分析を行って4種類に類型化した。それによれば、オルタナティブスクールは、経験学習や利用者・保護者を巻き込んだ意思決定などを主軸とする「討議指向型」、多様なニーズを持つ子ども・若者に寄り添う活動を行う「利用者中心型」、様々な問題や関心に全力で取り組んでおりシユタイナー学校や外国人学校などの割合が高い「主体育成型」、一条校の学習カリキュラムに準じた活動を展開する「学校補完型」に分類されるという。
- 2) なお、Bは2019年3月をもってXから転出し、都市部の公立中学に転入することが決まっている。きっかけは、またも父の転勤であるという。
- 3) 「中学部集会」の略称のこと。中学部の子どもたちと担当スタッフが参加し、週に1回中学部の決め事や問題について話し合いが行われる。

### 【参考文献】

- 朝倉景樹, 1995, 『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社.
- 倉石一郎, 2018, 「「教育機会確保」から「多様な」が消えたことの意味—形式主義と教育消費者の勝利という視覚からの解釈—」『教育学研究』85(2): 150-161.
- 藤根雅之, 2019a, 「オルタナティブスクール・フリースクール研究に関する文献検討: オルタナティブ教育研

- 究が位置づく知識構造と社会運動としての捉え直し」『大阪大学教育学年報』(24): 97-110.
- 藤根雅之, 2019b, 「オルタナティブスクールの類型化: 全国調査による活動内容のクラスター分析とテキストマイニングによる集合行為フレームの対応分析」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』(45): 127-145.
- 藤村晃成, 2015, 「フリースクールの子どものよる「進学」の意味づけ」『教育学研究紀要』61: 43-48.
- 山本宏樹, 2016, 「教育機会確保法の政治社会学: 情勢分析と権利保障実質化のための試論」『〈教育と社会〉研究』(26): 5-21.